

都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第4冊

御殿貯水池南遺跡Ⅱ

(第5次調査)

御殿貯水池南遺跡(第5次調査)

二〇一八年三月

高松市教育委員会

2018年3月

高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第4冊で、御殿貯水池南遺跡第5次調査の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：高松市鶴市町1518-5、1532-6、1671-6、7、1674-4
調査期間：平成29年3月6日～5月31日
調査面積：約833㎡
- 3 発掘調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員梶原慎司及び同課非常勤嘱託職員 三輪望が担当した。
- 4 本報告書の執筆は、第Ⅰ章及び第Ⅲ章を梶原、第Ⅱ章、第Ⅲ章第3節及び第Ⅳ章を三輪が担当した。編集は三輪が担当し、梶原が補佐した。
- 5 本報告書の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。
- 6 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖36版』を参照した。
- 7 発掘調査のうち、基準点打設業務及び完掘状況写真撮影業務を株式会社四航コンサルタントに委託した。
- 8 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会にて保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 試掘調査の概要	2
第3節 調査の経過	3

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査方法	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構・遺物	10

第4章 まとめ

第1節	5次調査の調査成果	24
第2節	3次調査区テラス状遺構の再検討	25

挿 図 目 次

第1図	木太鬼無線鶴市工区における調査略歴図	1
第2図	試掘トレンチ配置図	3
第3図	高松平野と遺跡の位置	4
第4図	御殿貯水池南遺跡と周辺の主要遺跡分布図	5, 6
第5図	御殿貯水池南遺跡5次調査区 遺構配置図 (S=1/150)	11, 12
第6図	南壁面・谷断面図 (S=1/80)	13
第7図	出土遺物実測図 (S=1/4)	13
第8図	SD01～03平・断面図 (S=1/80・40)	15
第9図	SR01平・断面図 (S=1/100・40)	17
第10図	SR02平・断面図 (S=1/100・40)	18
第11図	SK02～06平面図 (S=1/20)	19
第12図	御殿貯水池南遺跡5次調査区 (S=1/600)	24
第13図	御殿貯水池南遺跡1～4次調査区 (S=1/600)	24
第14図	御殿貯水池南遺跡3次調査 SD24～2平面図 (S=1/120)	25
第15図	園井土井遺跡 平面図	26

挿 表 目 次

第1表	遺構観察表	28, 29
第2表	遺物観察表	29
第3表	御殿貯水池南遺跡3次調査テラス状遺構 遺構観察表	29, 30

写 真 図 版 目 次

図版1	調査区全景と周辺風景 (南から)	図版5	SD01完掘状況 (南東から)
図版2	赤色立体地図からみた遺跡周辺地形 (1/5,000)		SD02完掘状況 (南東から)
	調査区全景 (南・北・東から)		SD03完掘状況 (南東から)
図版3	調査区西側 谷部 (南から)	図版6	SD02断面 (西から)
	SR01、02完掘状況 (南・南西から)		SD03・SK01断面 (西から)
図版4	SR01南側断面 (北から)		SK01完掘状況 (西から)
	SR01北側断面 (北から)		SK02断面 (東から)
	SR02断面 (北から)		SK03断面 (東から)
	SD01断面 (西から)		SK04断面 (北から)
	SD01、02、03完掘状況 (南から)		SK05断面 (北から)
			SK06断面 (北から)

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

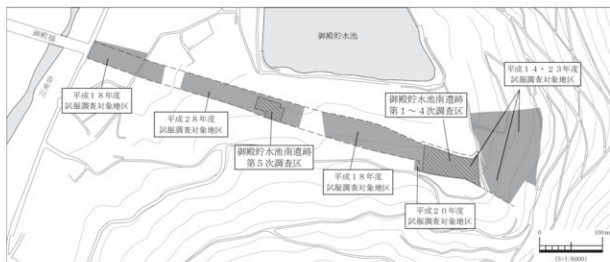
本発掘調査報告書は、高松市都市整備局道路整備課（以下、事業課とする）が事業主体である都市計画道路木太鬼無線の整備事業を調査原因としたものである。

同路線は高松市木太町と鬼無町を繋ぐ市内を東西に横断する幹線道路であり、高松市教育委員会（以下、市教委とする）では、事前に試掘調査を実施し整備範囲における埋蔵文化財の包蔵状況の把握に努めるとともに、これまでに西ハゼ工区、西春日工区及び鶴市工区で確認された周知の埋蔵文化財包蔵地「西ハゼ土居遺跡」「北山浦遺跡」「御殿貯水池南遺跡（第1～4次調査）」の発掘調査を実施し、調査報告書を刊行し記録保存を行ってきた。

本書報告の「御殿貯水池南遺跡（第5次調査）」については、事業課と市教委との協議の結果、鶴市工区における埋蔵文化財の包蔵状況が未確認の範囲（第1図参照）について平成29年2月1日から2月7日の実働5日間で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、本書で報告する範囲内で遺構を確認した。試掘調査の結果や周辺地形により、対象地が浄願寺山から派生する谷の間に挟まれた微高地上に立地することが明らかになり、御殿貯水池南遺跡と立地や遺構等が類似することから周知の埋蔵文化財包蔵地「御殿貯水池南遺跡」として追加登録した。

発掘調査については、事業課と市教委との協議の上、工事計画に合わせて高松市長から香川県教育委員会（以下、県教委とする）へ文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知を平成29年2月21日付けで提出したところ、同年3月2日付けで県教委から工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて、市教委は平成29年3月6日付けで文化財保護法第99条第1項の規定による報告を県教委に提出し、記録保存を目的とした調査を実施したものである。

以上の調査により、木太鬼無線鶴市工区における埋蔵文化財の包蔵状況の確認及び発掘調査は完了した。



第1図 木太鬼無線鶴市工区における調査略歴図

第2節 試掘調査の概要

事業対象地の試掘調査は、平成29年2月1日から2月7日にかけて実働5日間で実施した。トレンチは計11本設定した(第2図)。

1・2トレンチ

近年まで宅地が存在した箇所である。層序は地表面から順に花崗土、造成土、黄色ブロックを含む灰黄色シルト層(地山)であり、宅地造成のため削平された後に造成土が盛られたことを確認した。遺構・遺物は出土しなかった。

3・4・5・6トレンチ

近年まで畑地であった箇所である。層序は地表面から順に表土、灰褐色又は黄褐色細粒砂層、黄色ブロックを含む灰黄色シルト層(地山)である。灰褐色又は黄褐色細粒砂層は流土と考えられ、遺構面は地山である灰黄色シルト層の上面である。遺構は4・5・6トレンチで流路と考えられる溝状遺構を複数確認した。溝状遺構の埋土は全て明オリブ灰色であり、白色の小〜大礫(直径10〜20 cm程度)を含んでいた。出土遺物はいずれも近代以降のものである。明オリブ灰色の埋土である遺構は発掘調査区内でも検出され、出土遺物の帰属時期は全て近代以降であった。以上より4・5・6トレンチで検出した明オリブ灰色の埋土である溝状遺構の帰属時期は近代以降である。

7・8トレンチ

近年まで畑地であった箇所である。層序は地表面から順に表土、黒色ブロックを含む黄褐色シルト層、白色砂粒を含むいぶい黄褐色細粒砂層である。黒色ブロックを含む黄褐色シルト層は流土と考えられ、いぶい黄褐色細粒砂層が白色砂粒を含む水性砂質層であること、周辺の地形等からトレンチの範囲が浅い谷状地形であることが理解できる。

9・10トレンチ

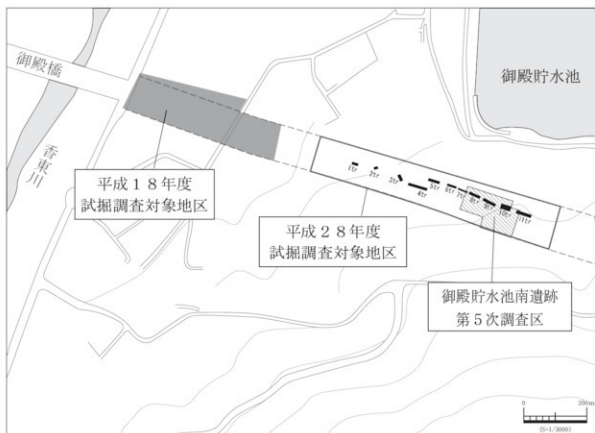
近年まで畑地であった箇所である。層序は表土、黄色ブロックを含む黄褐色シルト層(地山)である。遺構面は地山である黄褐色シルト層の上面で、表土下約10 cmである。10トレンチでは等高線に平行する溝1条とピットを検出した。いずれも埋土はいぶい黄褐色シルトの層であり、溝からは土師質土器片が出土したが、細片のため所属時期は不明である。

11トレンチ

東側に深い谷があり、谷に向かって落ちていく場所に位置する。近年まで畑地であった箇所である。層序は地表面から順に表土、白色砂粒を含む明黄褐色細粒砂層である。明黄褐色細粒砂層が白色砂粒を含む水性砂質層であること、周辺の地形等からトレンチの東側以降は谷状地形であることが理解できる。

埋蔵文化財包蔵地の登録について

試掘調査の結果、10トレンチで中世以前と考えられる遺構を確認した。遺構からは時期の判明する遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明だが、御殿貯水池南遺跡と立地や遺構の性格が類似することから、弥生時代又は中世に所属すると考えた。試掘調査と周辺地形の状況から、遺構を検出した範囲が浄願寺山から派生する谷の間に挟まれた微高地で、安定した地盤の土地であることが明らかになったことから、谷の埋土を確認した7トレンチと11トレンチの間の範囲を埋蔵文化財包蔵地「御殿貯水池南遺跡」として追加登録された。



第2図 試掘トレンチ配置図

第3節 調査の経過

調査区が広大かつ廃土を置くスペースが調査区から離れていたため、調査区を東西に二分し、東側から発掘調査を実施した。発掘調査は3月6日から開始し、5月31日に終了した。主な工程は以下の通りである。

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 3月6日 | 東側調査区の重機掘削開始、遺構掘削開始 |
| 3月9日 | 東側調査区の重機掘削終了 |
| 3月10日 | 基準点・水準点の設置 |
| 4月4日 | 東側調査区を一部重機掘削 |
| 4月6日 | 西側調査区に仮置きしていた廃土をさらに西側へ移動させる |
| 4月13日 | 西側調査区の重機掘削開始、遺構掘削開始 |
| 4月18日 | 西側調査区の重機掘削終了 |
| 5月9日 | ボール撮影による完掘状況の写真撮影 |
| 5月31日 | 機材等撤収の完了 |

整理作業は6月1日から開始し、12月28日に終了した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

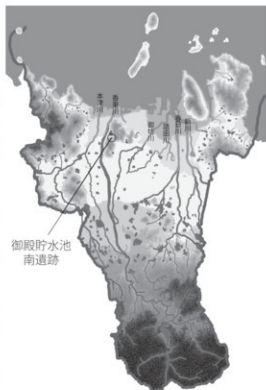
第1節 地理的環境

高松平野は香川県のほぼ中央に位置し、北は瀬戸内海に面し、東は立石山地、西は五色台、堂山山地によって画され、南は東西に走る讃岐山脈に囲まれた東西20 km、南北16 kmの沖積平野である。讃岐山脈を源として、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、石清尾山山塊を挟み香東川、本津川が北流し、主に香東川、新川、春日川の河川活動によって形成された氾濫源や三角州、扇状地からなる。現在、香東川は近世初頭に生駒家の家臣西嶋八兵衛によって流路が改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓で二手にわかれ、同山塊の東麓（現御坊川）と西麓を流れていたと考えられている。

香川県では花崗岩類の上に讃岐岩質安山岩及び凝灰岩類が覆うことで風化をまねがれ形成された残丘が平野部に点在し、独特な景観を作っている。山頂に平坦面を持つメサと円錐形のピュートがみられるが、石清尾山山塊は後者にあたる。高松平野の東西を画する立石山地や五色台、堂山山地もこれによって形成された。石清尾山山塊は5つの山で形成されている。東側に稲荷山と室山が南北に並び、その西側に峰山と石清尾山が東西方向に連なる。峰山の南に浄願寺山が連なっている。

御殿貯水池南遺跡は、高松平野北西部に位置する石清尾山山塊のひとつ、浄願寺山と峰山に挟まれた谷状地形に位置する。遺跡は浄願寺山北側面で緩斜しており、標高は約27～36mで勝賀山や香東川、本津川河口域および瀬戸内海を一望できる。

高松平野では谷間を塞ぎ止めた「谷池」が多く見られるが、本遺跡の北に位置する御殿貯水池もそのひとつである。1938年から築造され、約70万tの貯水が可能な溜池である。



第3図 高松平野と遺跡の位置

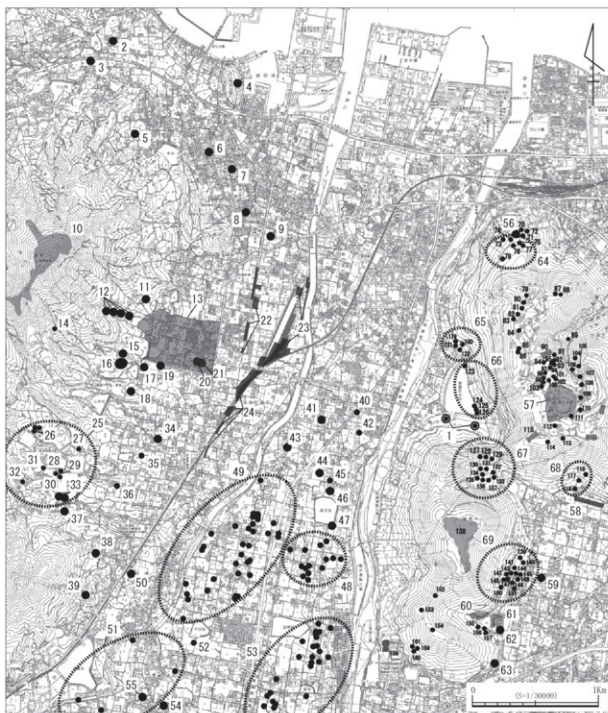
第2節 歴史的環境

本遺跡が属する香東川・本津川下流域及び石清尾山山塊の動態について述べる。

旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、高松平野西部を流れる本津川流域において比較的良好な状態で確認される。六ツ目山北麓に所在する中間西井坪遺跡では角錐状石器やナイフ形石器を主体とした複数の石器ブロックが確認された。他にも勝賀山東麓の香西南西打遺跡や西打遺跡からも石器が出土している。

縄文時代においても明確な遺構が確認されたものは少ない。西打遺跡では流路等から前期末の里木Ⅰ式土器や石器が出土した。また鬼無藤井遺跡では旧河道から晩期中葉の土器が数点出土している。



第4図 御殿貯水池南遺跡と周辺の主要遺跡分布

1 御殿貯水池南遺跡 2 植松城跡 (1) 3 植松城跡 (2) 4 芝山城跡 5 勝賀庭跡 6 平賀下遺跡 7 藤尾城跡 8 作山城跡 9 香西南西打遺跡 (1) 10 勝賀城跡 11 沢池西古墳 12 かしが谷1～4号墳 13 佐料遺跡 14 山の神1号墳 15 虎池西古墳 16 善師垣古墳群 17 木舟池下古墳 18 今岡古墳 19 香西五郎塚 20 佐料城跡 21 植松吉兵衛時蔵碑 22 香西南西打遺跡 (2) 23 西打遺跡 24 鬼無藤井遺跡 25 神高池古墳群 (26 平木1～3号墳 27 鬼無大塚古墳 28 神高池西古墳 29 こめ塚古墳 30 神高池北西古墳 31 古宮古墳 32 空家古墳 33 神高池南西1・2号墳) 34 佐藤城跡 35 鬼無小学校東塚 36 (塚) 37 山口遺跡 38 桃太郎神社西遺跡 39 袋山古墳跡 40 あきやま塚 41 筑城跡 42 中所地神社前塚 43 王墓古墳 44 相作牛塚古墳 45 (塚) 46 相作馬塚 47 飯田町東青木遺跡 48 青木1～14号塚 49 飯田西1～4・7～37号塚 50 鬼塚古墳 51 御殿1～3・5号塚 52 半田池南小塚 53 紙漣1～17,19～24・26号塚 54 御殿大塚 55 小比賀家住宅 56 下ノ山遺跡 57 摺鉢谷遺跡 58 北山浦遺跡 59 南山浦遺跡 60 片山池塚跡群 61 坂田慶寺・坂田慶寺下層遺跡 62 坂田慶寺南塚跡 63 小山塚跡 64 木里神社2～6号塚 65 御殿神社古墳群1～4号墳 66 御殿貯水池古墳群1～4号墳 67 野山古墳群 68 北山浦古墳群 69 南山浦古墳群

【石清尾山塊所在の古墳】

70 西方寺 4 号墳 71 西方寺 5 号墳 72 西方寺 6 号墳 73 木里神社 2 号墳 74 木里神社 3 号墳 75 木里神社 5 号墳 76 木里神社 4 号墳 77 木里神社 6 号墳 78 木里神社 1 号墳 79 石清尾山 13 号墳 80 石清尾山 17 号墳 81 石清尾山 18 号墳 82 石清尾山 12 号墳 83 石清尾山 11 号墳 84 石清尾山 19 号墳 85 石清尾山 20 号墳 86 石清尾山 10 号墳 87 石清尾山 14 号墳 88 石清尾山 15 号墳 89 石清尾山 23 号墳 90 石清尾山 9 号墳 91 摺鉢谷西斜面 5 号墳 92 石清尾山 7 号墳 93 石清尾山 8 号墳 94 摺鉢谷西斜面 4 号墳 95 石清尾山 21 号墳 96 石清尾山 6 号墳 97 摺鉢谷西斜面 3 号墳 98 摺鉢谷西斜面 1 号墳 99 石清尾山 3 号墳 100 摺鉢谷西斜面 2 号墳 101 石清尾山 5 号墳 102 石清尾山 4 号墳 103 石清尾山 2 号墳 104 摺鉢谷東斜面 1 号墳 105 摺鉢谷東斜面 2 号墳 106 摺鉢谷東斜面 3 号墳 107 摺鉢谷東斜面 5 号墳 108 摺鉢谷東斜面 7 号墳 109 摺鉢谷東斜面 10 号墳 110 摺鉢谷東斜面 12 号墳 111 摺鉢谷東斜面 13 号墳 112 摺鉢谷東斜面 15 号墳 113 石清尾山 1 号墳 114 石清尾山 22 号墳 115 鶴塚古墳 116 北山浦 3 号墳 117 北山浦 1 号墳 118 北山浦 2 号墳 119 御殿神社 2 号墳 120 御殿神社 3 号墳 121 御殿神社 1 号墳 122 御殿神社 4 号墳 123 御殿貯水池 4 号墳 124 御殿貯水池 1 号墳 125 御殿貯水池 2 号墳 126 御殿貯水池 3 号墳 127 野山 10 号墳 128 野山 11 号墳 129 野山 3 号墳 130 野山 9 号墳 131 野山 1 号墳 132 野山 5 号墳 133 野山 6 号墳 134 野山 2 号墳 135 野山 8 号墳 136 野山 4 号墳 137 野山 7 号墳 138 浄願寺山古墳群 139 南山浦 12 号墳 140 南山浦 13 号墳 141 南山浦 11 号墳 142 南山浦 6 号墳 143 南山浦 9 号墳 144 南山浦 10 号墳 145 南山浦 8 号墳 146 南山浦 4 号墳 147 南山浦 5 号墳 148 南山浦 7 号墳 149 南山浦 3 号墳 150 南山浦 2 号墳 151 南山浦 1 号墳 152 浄願寺山 56 号墳 153 浄願寺山 57 号墳 154 小山山頂古墳 155 片山池 1 号墳 156 片山池 2 号墳 157 片山池 3 号墳 158 がめ塚古墳 159 がめ塚 2 号墳 160 がめ塚 3 号墳 161 がめ塚 4 号墳

弥生時代

勝賀山東麓では弥生時代前期から古代にかけて数本の旧河道が存在しており、旧河道に挟まれた微高地上に集落が形成された。前期前半は西打遺跡において溝や土坑が確認され、旧河道から土器が多く出土した。香西南西打遺跡では旧河道から土器が出土し、近隣の微高地上に居住域が想定できる。前期後半になると鬼無藤井遺跡において環濠集落が出現する。旧河道を挟んで南に広がる微高地上にもわずかながら土坑や溝から土器が出土するなど、各微高地上に小規模な集落が比較的短期間営まれていたといえる。

中期になると、現時点では本津川下流域において遺構が確認できない。後期になると、香西南西打遺跡では地形に沿った溝が数条検出される。西打遺跡では掘立柱建物を主体とする集落が展開するも、1 型式の幅を超えることなく廃絶する。やや標高が高い場所に位置する佐料遺跡も後期後葉に埋没した自然河道及び包合層から大量の土器が出土しており、近隣に集落が形成されたが、洪水等により短期間で廃絶したとみられる。藤尾城跡からは吉備の特殊器台、特殊壺が出土している。海沿いの小高い山に位置し北側は当時海であったと考えられ、海を意識した場所から吉備の土器が出土したといえる。

さて、本遺跡が所在する石清尾山山塊の動向に触れる。摺鉢谷遺跡は峰山山頂に位置し、中期中葉から後葉の弥生土器や石器が多数採集されているため、近くに集落が広がっていた可能性が高い。また、浄願寺山でも、東麓に広がる南山浦古墳群の墳丘の盛土から中期後半の土器がまとまって出土しており、近くに集落が広がっていた可能性が高い。御殿貯水池南遺跡 1 ～ 4 次調査で水路と思われる溝と土坑、ピット等が確認され、後期後葉の土器が出土している。特殊器台や製塩土器、砲弾の可能性のある磨製石器が認められ、近隣に集落や墓域が存在する可能性がある。

古墳時代

古墳時代に入ると高松平野でも古墳の築造が開始される。本遺跡の東側に立地する石清尾山山塊において鶴尾神社 4 号墳の築造を端緒に石清尾山古墳群が形成された。基本的に前方後円墳という形をとるものの積石塚であり、棺の主軸は東西方向を採用している、双方中円墳が築造される等、在地色が強い古墳群であるといえる。同時期に勝賀山の東の尾根上にかしが谷古墳群が築造されている。盛土による扁平な古墳で主体部は堅式石室、箱式石棺である。

中期前葉に石清尾山山塊の築造が終息すると時期を同じくして今岡古墳が築造された。勝賀山から東へ延びる尾根の先端に位置し、全長約60mの盛土の前方後円墳である。墳丘に円筒埴輪や形象埴輪、主体部に長持形の土師質陶棺が置かれていた等から畿内と密接な関係を持つ古墳であると考えられる。これらの埴輪や陶棺は六ツ目山北麓の中間西井坪遺跡で製作されたようである。

今岡古墳の築造後、本地域では中小規模（20～30m級）の前方後円墳・円墳が築造されるようになる。石清尾山山塊南端では中期後葉に所在するが塚古墳、本津川と香東川に挟まれた平野部においては中期後葉～後期前葉に弦打王墓古墳、相作牛塚古墳、相作馬塚古墳、青木1号塚が築造される。相作牛塚古墳は開発に伴う遺物採集、相作馬塚古墳は発掘調査がされている。その結果、墳丘上には円筒埴輪・形象埴輪を配置し、須恵器や甲冑等が副葬されたことがあきらかとなった。中でも相作馬塚古墳は副葬品や主体部の形態等から渡来系の要素が読み取れる。

後期前葉以降は平野部で古墳が見られなくなり、石清尾山山塊や勝賀山東麓で横穴式石室を採用した群集墳の築造がはじまる。勝賀山東麓では山野塚古墳から始まる神高池古墳群が知られている。多くが巨石墳であり、特に古宮古墳は石室の規模が一番大きく、出土遺物も武具やガラス玉、勾玉等が出土している。本遺跡の背後に立地する浄願寺山古墳群、野山古墳群、御殿貯水池の北側、石清尾山西麓に御殿神社1～4号墳、貯水池内に存在する御殿貯水池1～4号古墳群も後期に築造されたと考えられる。浄願寺山古墳群はおおよそ50基の古墳が確認されている。野山古墳群では当該期の古墳が8基のうち3基現存しているが、遺物等は出土していない。御殿神社古墳群は4基があったが現在は1基のみ現存しており詳細不明である。いずれも横穴式石室だったといわれる。御殿貯水池古墳群も横穴式石室が存在したと伝わるだけであったが、赤色立体図で確認したところ、御殿神社古墳群、御殿貯水池古墳群の位置に円状の高まりが発見できた。

古代

平野西部では白鳳期に創建されたと推定される勝賀廃寺と坂田廃寺が知られる。坂田廃寺は浄願寺山の東麓に立地し、近隣には坂田廃寺へ瓦を供給していたと考えられる南山浦1号窯跡、片山池窯跡、坂田廃寺南窯跡が所在する。片山池窯跡は発掘調査がされており、有鉢式平窯の瓦窯で9世紀末～10世紀代に操業していたと考えられている。

本津川下流域では、縄文・弥生時代から存在していた旧河道が概ねこの時期に埋没し、香西南西打遺跡では現状の条里地割に合致する溝が一部確認できるようになるなど、地形に影響を受けない遺構が出現し始める。また、鬼無藤井遺跡では灌漑水路や土坑、ピットが散見されるようになる。香西南西打遺跡では10～13世紀の粘土採掘坑が確認されており、土師器甕や羽釜が多く出土することから近くで土器生産が盛んであったことが窺われる。

中世

古代末から中世にはいと条里地割及び遺構がより広範囲に確認できるようになる。

西打遺跡は11世紀後半から12世紀後半に条里坪界溝や屋敷地、集落が展開する。中でも屋敷地は条里坪界溝に囲まれ、楠葉産黒色土器や和泉型瓦器碗、東海系山茶碗など他地域産の土器が多く出土しており、遺跡の立地条件からも「当該期の物資流通にも関与している」者の存在が想定されている。鬼無藤井遺跡では12世紀を中心に掘立柱建物群が確認されており、そのうちのひとつからは白磁や瓦が出土した。また、水田跡も確認されている。

西打遺跡は13世紀末～14世紀初頭になると再び調査区全体に条里地割に沿う溝が現れ、溝に囲郭された屋敷地や集落、土坑墓が出現する。14世紀前半に遺構が激減するが、当該地は16世紀後半まで継続する。鬼無藤井遺跡も13～14世紀に入ると、調査区のほぼ全域で条里地割が確認され

るようになる。建物跡は確認できないものの、青磁碗や布目瓦等の遺物が豊富であることから近隣に有力者の存在を想像できる。

本遺跡から香東川を挟んで対岸に位置する筑城城跡は13世紀後半～14世紀前葉に条里地割に沿う溝及び区画溝が出土している。建物跡は検出されなかったが金銅製の仏像や青磁碗、土器など出土遺物が多いことから居住城が近くに広がっていると想定できる。

中世後半になると、本津川下流域は香西氏の本拠地となる。居城の佐科城、詰城として勝賀城、出城として芝山城などが築城された。香西氏を支えた地元領主の城、飯田城、筑城城なども築かれている。香西氏と関わりが想定される遺構として、香西南西打遺跡があげられる。前述してきた香西南西打遺跡より北へ600mほど海に近い場所に位置し、藤尾城や作山城が近隣に所在する。15世紀後半～16世紀中葉を中心としたコの字状区画溝にかこまれた屋敷地が検出され、大量の国内陶器、中国陶磁器、北宋銭などが出土している。文安2(1445)年に書かれた『兵庫北関入船納帳』によると当時の本津川河口付近には香西浦が記述されており、その活発な商業活動を裏付けることができる。筑城城跡からは16世紀台の条里地割に沿う溝や柱穴、井戸、が出土している。城の年代と合致することから城の施設の一部と考えられている。

本津川と香東川に挟まれた平野に点在する土盛り塚には、「武将の墓」という言い伝えが残るものもある。その塚の一つ、相作馬塚古墳は14世紀前葉から16世紀前半まで連続した墓域として利用されていたことが明らかとなっている。そのほか、鬼無藤井遺跡からも集石が存在していたとする場所から石とともに14～15世紀と考えられる人骨が2体出土している。

本遺跡の1～4次調査では13世紀後半から14世紀前葉の遺構、遺物が確認されている。山の斜面にテラス状の平坦な面を作っており、建造物が存在していた可能性がある。出土遺物が日常品で占められることから近隣集落に関係する居住地であるとされている。

近世・近代

豊臣秀吉による四国平定により、天正13(1585)年に香西氏が滅亡する。その後生駒氏が讃岐一国の領主となり、ため池の築造など開発が進められたことがわかっている。香東川の付け替えも17世紀に行われている。当該地周辺の近世遺構は、鬼無藤井遺跡で建物跡や井戸、幕末～明治の屋敷跡が確認できる。香西南西打遺跡や西打遺跡からは小規模な溝が検出されたのみで居住域ではなくなっていたようである。

江戸時代末期に描かれた『高松藩領絵図 香川群西絵図 己』を見ると、現在とほぼ同じ位置に小さな池と「奥池」の文字が記されていることを確認できる。このことから少なくとも江戸時代末期(1841～1863年)には築造されていたことがわかる。その後、昭和13年から水源不足解消のため御殿貯水池及び浄水場が築造された。第二次世界大戦のため一時中断するものの、昭和29年に完成して現在の姿になっている。

主要参考文献

大久保徹也 2006『概況 讃岐の前期古墳』『香川考古』第10号 特別号

香川県教育委員会編 2000『西打遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

香川県教育委員会編 2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十七冊 中間西井坪遺跡Ⅲ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

香川県教育委員会編 2002『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

高松市教育委員会編 1973『石清尾山境古墳群調査報告』高松市教育委員会

高松市教育委員会編 1983『鶴尾神社 4 号墳調査報告書』高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会編 1985『南山浦古墳群調査報告書』高松市教育委員会

高松市教育委員会編 1986『かしが谷 2 号墳・3 号墳発掘調査報告書』高松市教育委員会

高松市教育委員会編 1999『筑城城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 43 集

高松市教育委員会編 2000『香西南西打道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 46 集

高松市教育委員会編 2000『香西南西打道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 50 集

高松市教育委員会編 2001『鬼無藤井道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 51 集

高松市教育委員会編 2005『神高古墳群』高松市埋蔵文化財調査報告第 82 集

高松市教育委員会編 2008『藤尾城跡 作山城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 117 集

高松市教育委員会編 2009『石ヶ鼻古墳 御殿天神社古墳』高松市埋蔵文化財調査報告第 119 集

高松市教育委員会編 2009『片山池窯跡群』高松市埋蔵文化財調査報告第 120 集

高松市教育委員会編 2010『相作牛塚古墳』高松市埋蔵文化財調査報告第 125 集

高松市教育委員会編 2012『北山浦道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 137 集

高松市教育委員会編 2014『佐料道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 155 集

高松市教育委員会編 2015『相作馬塚』高松市埋蔵文化財調査報告第 157 集

高松市教育委員会編 2015『御殿貯水池南道跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 161 集

高松市教育委員会編 2017『相作馬塚古墳Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第 185 集

高松市水道局水道史編集室編 1990「第四次拡張事業」『高松市水道史』高松市水道局

田中健二 2014「高松藩絵図」『MAPS ～古地図の楽しみ方～』高松市歴史資料館

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査方法

調査地は山の斜面に立地しており東側は深い谷であったため、表土の掘削による廃土の置場は調査地の西側に限定されていた。そのため調査地を東西に二分割し、交互に調査を実施した。

発掘調査は、表土から遺構面までを重機による掘削、その後人力により遺構面を精査し、遺構掘削を行った。

記録に際しては、3点の4級基準点打設を株式会社四航コンサルタントに業務委託し、基準点を基に1/20縮尺の平面図及び断面図を作図した。写真撮影は35mmフィルムカメラを用い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録し、補助的にデジタルカメラも用いた。完掘状況の全景写真撮影は株式会社四航コンサルタントに業務委託し、ボール撮影を行った。

第2節 基本層序

調査地は標高約27～36mの丘陵上にあり、東西方向に見ると東側の尾根から西側の埋没谷へと下る地形である。本調査では、南側壁面a-a'の土層断面を観察し記録した(第6図)。南側壁面付近では近代以降の遺構が複数みられ、断面においても東側で複数の遺構が掘り込まれている様子が窺える。

基本層序について述べる。表土は果樹園の耕作土である。表土の下層からは地形に沿って谷部や裾部に向かって流土層が認められる。傾斜が急勾配である調査区南側では、流土層が厚く堆積しているが、傾斜が緩慢となる調査区北側では表土の直下で地山層が確認できる。流土層の下層からは黄色、黒色ブロックを含む褐灰色シルト層の地山が認められる。近代以降の遺構は、流土層の上面が遺構面となっているため調査区北側では地山の確定が困難であった。なお、谷部については遺物が出土していないため、埋没時期は不明である。

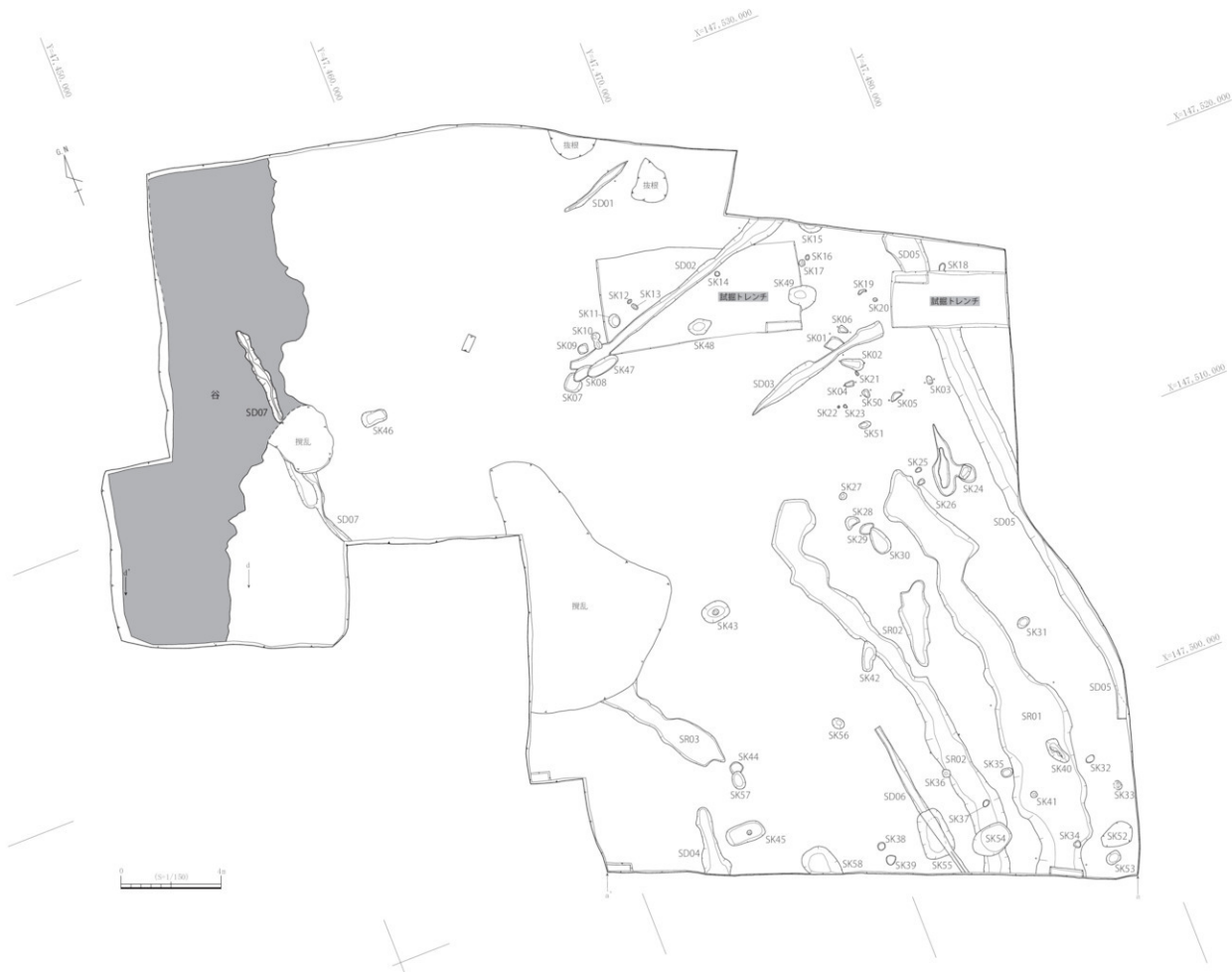
第3節 遺構・遺物

(1) 概要(第5、6、7図)

調査区は東の深い谷と西の浅い谷に挟まれた微高地上に立地し、調査区内は南から北へ、東から西へと緩やかに下がっている。遺構は主に南東部から北東部にかけて広がっており、傾斜に沿って南北方向に走る溝及び流路を数条検出した。また、勾配が緩やかになる北東部からは等高線に平行して東西方向に等間隔で並ぶ溝が3条と数基の土坑が比較的多く検出された。調査区西側の谷については、谷埋土から現代の溝が1条検出したが埋没年代は不明である。

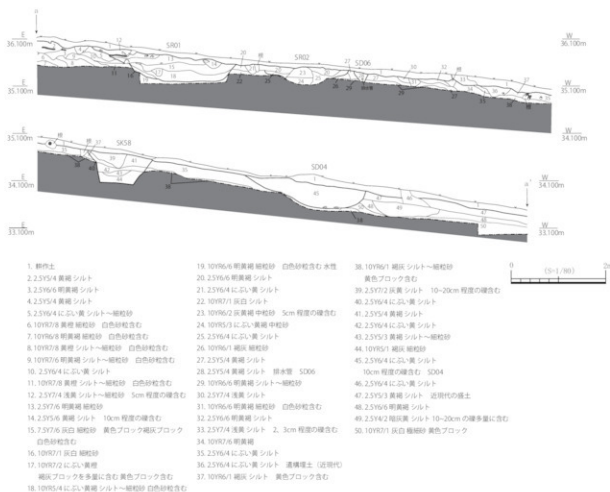
遺物はSD02やSK05、46から土師質土器片が数点出土したほか、谷埋土から土師質土器片が1点出土した。いずれも図化に耐えうるものはなく、遺構の詳細な年代等は不明であるが、特徴や大まかな年代が推察可能なものは各遺構ごとに報告する。

遺構精査中は土師質土器片及び磁器片が数点出土した。そのうち図化できたものは2点である(第

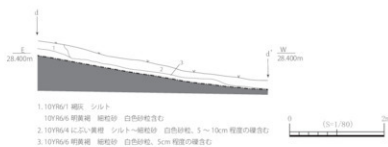


第5図 御殿貯水池南道跡5次調査区 遺構配置図 (S=1/150)

南壁面図



谷断面図



第6図 南壁面・谷断面図 (S=1/80)



第7図 出土遺物実測図 (S=1/4)

7図)。1は土師質土器皿の口縁部である。復元口径は約8cmを測り、内外面にナデが施されている。2は土師質土器皿の底部である。どちらも磨滅が激しく小片であるが、胎土から中世に所属すると考えられる。図化できなかったが、酷似する胎土の土師質土器片が3点出土している。

他にも、厚さ約7mmで1mm程度の長石チャートが多く含み非常に硬質でにぶい赤褐色を呈す土師質土器片が1点出土した。前報文で報告した弥生土器と胎土が酷似するため弥生土器片と考えられる。同様に弥生土器片と考えられる土器片が3点出土した。また、1mm程度のチャートをまんべんなく含み、内外面にハケ目を有する土師質土器片が出土した。古代～中世の煮沸具の体部と考えられる。

谷埋土からは土師質土器片が1点出土した。厚さ4mm程度で、1mm程度の長石を多く含み橙色を呈する。胎土の特徴から中世の土師質土器と考えられる。

(2) 溝(第8図)

SD01～07の7条の溝を検出した。中世以前に遡る遺構としては、SD01～03が挙げられる。3条の溝の埋土は全てにぶい黄褐色シルト質の単層で、同様な断面形状をしている。また、3条の溝は東西方向に直線的で、各溝の間隔は約5.2m前後とほぼ等間隔に平行して並んでいる。以上の所見から3条の溝は相互に関連した遺構であると考えられる。遺構からはほとんど遺物が出土していないため詳細な時期比定は困難だが、SD02から中世の土師質土器が出土しており、1～4次調査の成果を踏まえると(第IV章参照)、中世の所産であると考えられる。

SD04～07については出土遺物から近代以降の所産であることが判明した。

SD01

調査区北東部の標高29.1～29.6mの地点で検出した。東西方向に走る直線的な溝である。全体は東へ緩やかに傾斜する。平面形状は長軸3.6m、最大幅3.6cmである。断面形状は深さは約6cmで舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土しなかった。

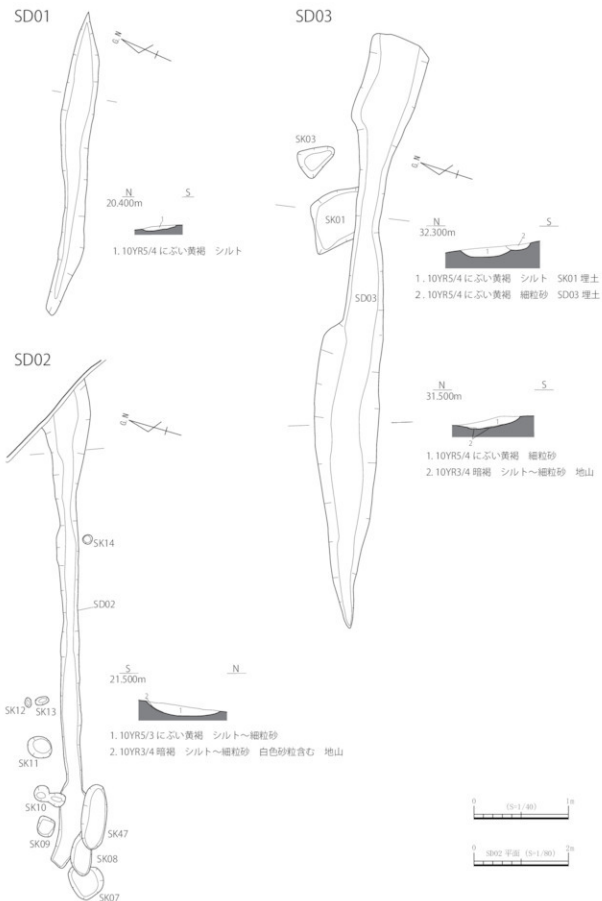
SD02

調査区北東部の標高29.8～30mの地点で検出した。東西方向に走る直線的な溝である。全体は東へ緩やかに傾斜する。溝の西端では複数の土抗に切られている。平面形状は長軸約9.5m、幅約0.3～1.3mである。断面形状は深さ約10cmで緩やかな船底形を呈する。埋土はSD01と同じにぶい黄褐色シルト質の単層である。

遺物は土師質土器片が2点出土したが、残存状況が悪いため図化していない。遺物は磨滅しており器面調整は不明である。1点は厚さ5～7mmを測る。胎土は1mm程度の長石、チャート、角閃石、赤褐色粒を多く含み、褐色を呈し硬質。弥生土器片と考えられる。もう1点は厚さ3～6mmを測り、1mm以下のチャートを少量含む。橙色を呈し、中世の土師質土器と考えられる。

SD03

調査区北東部の標高31.1～32.6mの地点で検出した。東西方向に走る直線的な溝である。全体は東へ緩やかに傾斜する。溝の東側ではSK01を切っている。平面形状は長軸約6m、幅約0.2～0.6mである。断面形状は深さ約10cmで緩やかな船底形を呈する。埋土はSD01・02と同じにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土しなかった。



第8図 SD01～03平・断面図 (S = 1/80・40)

(3) 流路 (第9、10図)

SR01

調査区南東部の標高32.2～35.6mの地点で検出した。南北方向に走り全体は北へ傾斜する。遺構の北側でSK34、40、41に切られる。平面形状は長軸約18m、幅約1～2mである。断面形状は深さ約0.1～0.3mで船底形を呈する。埋土はにぶい黄色のシルト～細粒砂質で白色砂粒を含み、西側上層に拳大の礫を多量に含む。北へ下るにつれ深度が浅くなり、中心に浅く粘質のシルトが混じるようになる。遺物は出土していないため、埋没年代等は不明である。

SR02

調査区南東部の標高32.9～35.4mの地点で検出した。SR01に隣接している。南北方向に走り全体は北へ傾斜する。SK36、37、42、54に切られる。平面形状は長軸約17.2m、幅約0.5～1.3mである。断面形状は深さ約0.4mで船底形を呈する。埋土は黄褐色又は明黄褐色のシルト～細粒砂質で白色砂粒を含み、北側へ下ると拳大の礫を多量に含むようになる。遺物は出土していないため、埋没年代等は不明である。

SR03

調査区南側の標高31.9～33.1mの地点で検出した。遺構の北側は現代の小屋建設に伴う攪乱によって失われている。平面形状は長軸約5m、幅約0.6～1.4mである。断面形状は深さ約0.2mで船底形を呈する。埋土は、SR01、02と同様の黄色系のシルト～細粒砂質で白色砂粒や拳大の礫を含む。遺物は出土していないため、埋没年代等は不明である。

(4) 土坑 (第8、11図)

SK01～58の58基の土坑を検出した。土坑の埋土は、灰色系、黄褐色系又はオリーブ灰色系に大別でき、埋土の色調から所属時期を想定することが可能である。灰色系の遺構はSK02～05で、第1～4次調査の成果及びSK05出土遺物から中世に所属するものと考えられる。黄褐色系の遺構はSK01、06～39で、中世から現代の遺構又は木の根によるものと考えられる。オリーブ灰色系の遺構はSK40～46、50、51で、現代の遺物が出土していることから現代に所属する。また、色調を記載していないSK47～49、52～58についても遺構から現代の遺物が出土しているため現代に所属する。

ここではSK01～39について記述する。

SK01

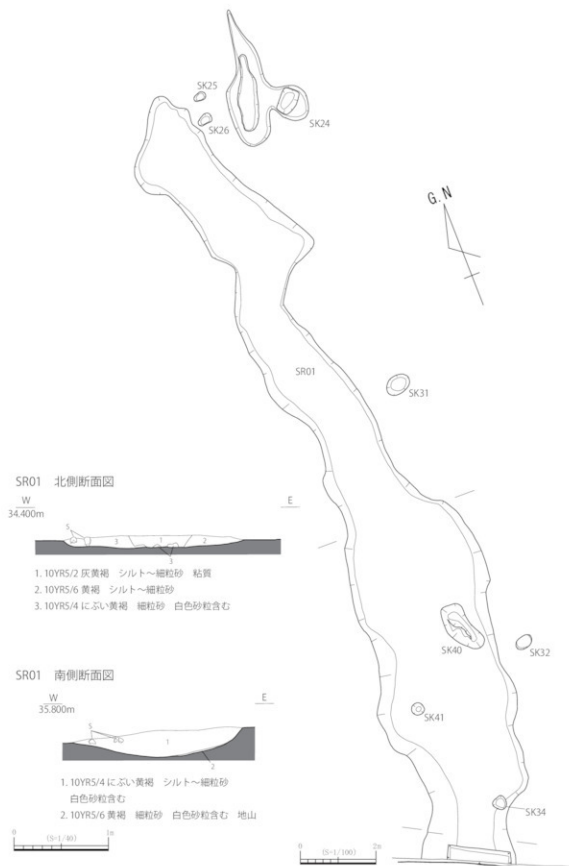
調査区北東部の標高31mの地点で検出した。南端でSD03に切られている。平面形状は59×46cmの方形で、深さ10cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で、SD03の埋土よりも細かい。遺物は出土していない。所属時期は埋土の特徴及び遺構の切り合い関係から中世と考えられる。

SK02

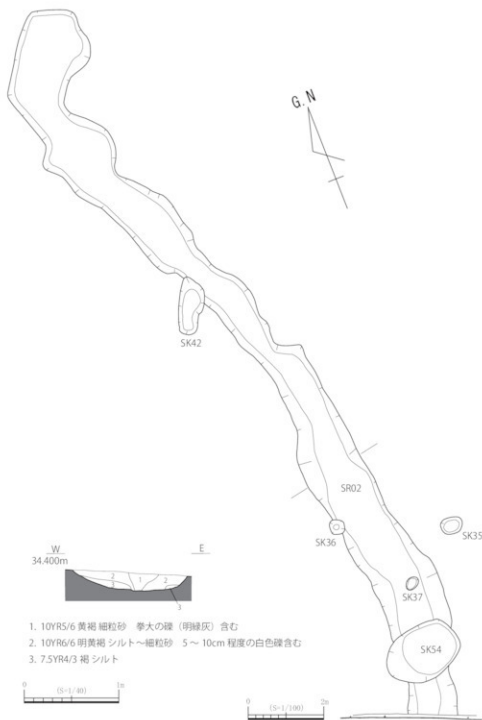
調査区北東部の標高31.2mの地点で検出した。平面形状は92×39cmの楕円形で、深さ10cmである。埋土は灰色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は埋土の特徴から中世と考えられる。

SK03

調査区北東部の標高31.7mの地点で検出した。平面形状は35×25cmの楕円形で、深さ15cmである。埋土は灰黄褐色シルト質の単層で白色砂粒を含む。遺物は出土していない。所属時

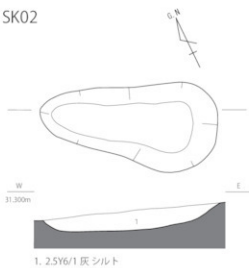


第9図 SR01平・断面図 (S=1/100・40)

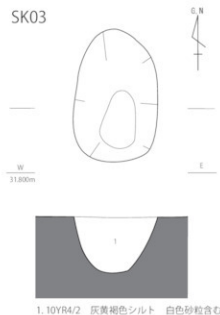


第10図 SR02平・断面図 (S=1/100・40)

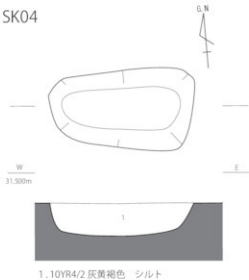
SK02



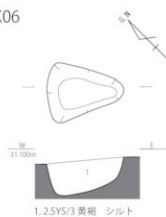
SK03



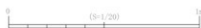
SK04



SK06



SK05



第11図 SK02～06 平断面図 (S=1/20)

期は埋土の特徴から中世と考えられる。

SK04

調査区北東部の標高31.4mの地点で検出した。平面形状は38×20cmの楕円形で、深さ8cmである。埋土は灰黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は埋土の特徴から中世と考えられる。

SK05

調査区北東部の標高31.5mの地点で検出した。平面形状は46×28cmの三角形で、深さ13cmである。埋土は灰色シルト質の単層で、底では拳大の礫がみられた。遺物は土師質土器片が1点出土した。器壁は2～3mm程度と薄く、胎土は1mm程度の赤褐色礫を僅かに含み、赤褐色を呈する。磨滅のため調整不明瞭である。詳細な年代は不明であるが中世の土師質土器皿または坏と考える。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から中世と考えられる。

SK06

調査区北東部の標高31mの地点で検出した。平面形状は43×21cmの三角形で、深さ17cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK07

調査区北東部の標高30.3mの地点で検出した。北端をSK08に切られている。平面形状は76×70cmの楕円形で、深さ37cmである。埋土は浅黄色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK08

調査区北東部の標高30.1mの地点で検出した。SD02とSK07を切り、北西端をSK47に切られている。平面形状は92×44cmの楕円形で、深さ10cmである。埋土は灰黄色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK09

調査区北東部の標高30.1mの地点で検出した。平面形状は41×35cmの円形で、深さ21cmである。埋土は明灰黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK10

調査区北東部の標高30mの地点で検出した。南端でSD02を切る。平面形状は67×33cmの不整形楕円形で、土坑が2基重なっている可能性がある。深さは11cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK11

調査区北東部の標高30mの地点で検出した。平面形状は55×46cmの円形で、深さ17cmである。埋土は暗灰黄色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK12

調査区北東部の標高29.9mの地点で検出した。平面形状は21×13cmの円形で、深さ8cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK13

調査区北東部の標高29.9mの地点で検出した。平面形状は29×18cmの楕円形で、深さ9cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK14

調査区北東部の標高30.1mの地点で検出した。平面形状は21×20cmの円形で、深さ5cm

mである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK15

調査区北東部の標高約30.3mの地点で検出した。平面形状は93×30cmの円形で、深さ19cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層で白色砂粒を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK16

調査区北東部の標高30.5mの地点で検出した。平面形状は21×17cmの円形で、深さ2cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK17

調査区北東部の標高30.5mの地点で検出した。平面形状は26×24cmの円形で、深さ8cmである。埋土は灰褐色細粒砂質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK18

調査区北東部の標高30.9mの地点で検出した。平面形状は31×23cmの楕円形で、深さ9cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK19

調査区北東部の標高30.9mの地点で検出した。平面形状は37×6cmの楕円形で、深さ9cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で黄色ブロックを含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK20

調査区北東部の標高31mの地点で検出した。平面形状は19×16cmの円形で、深さ7cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で黄色ブロックを含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK21

調査区北東部の標高31.4mの地点で検出した。平面形状は21×10cmの楕円形で、深さ4cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK22

調査区北東部の標高31.6mの地点で検出した。平面形状は10×10cmの円形で、深さ5cmである。埋土は黒褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK23

調査区北東部の標高31.6mの地点で検出した。平面形状は27×11cmの楕円形で、深さ5cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で黒色ブロックを含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK24

調査区東部の標高32.2～32.5mの地点で検出した。土坑が2基重なっている可能性が高い。土坑の中で東側をSK24E、西側をSK24Wとした。SK24Eの平面形状は76×70cmの楕円形で、深さ54cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。SK24Wの平面形状は295×88cmの楕円形で、深さ44cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層で3～5mm程度の砂礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK25

調査区東部の標高32.2mの地点で検出した。平面形状は27×17cmの円形で、深さ5cmである。埋土は灰黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK26

調査区東部の標高32.2mの地点で検出した。平面形状は31×16cmの円形で、深さ7cmである。埋土は灰黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK27

調査区東部の標高32mの地点で検出した。平面形状は34×28cmの円形で、深さ11cmである。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質の単層で直径5cm程度の礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK28

調査区東部の標高32.2mの地点で検出した。平面形状は58×40cmの楕円形で、深さ12cmである。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質の単層で直径10cm程度の砂礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK29

調査区東部の標高32.2mの地点で検出した。SK30に切られる。平面形状は63×44cmの楕円形で、深さ18cmである。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質の単層で直径5～10cm程度の砂礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK30

調査区東部の標高33mの地点で検出した。SK29を切る。平面形状は116×76cmの楕円形で、深さ19cmである。埋土はにぶい黄褐色中粒砂質の単層で直径5～20cm程度の砂礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK31

調査区南東部の標高33.3mの地点で検出した。平面形状は54×36cmの楕円形で、深さ16cmである。埋土は暗灰黄色シルト質の単層である。遺物は土師質土器片が1点出土した。厚さは5mmで、胎土は1mm程度の長石やチャートを多く含み赤褐色を呈する。調整は摩耗のため不明瞭である。詳細な年代は不明であるが中世の土師質土器と考えられる。所属時期は出土遺物から中世と考えられる。

SK32

調査区南東部の標高34.6mの地点で検出した。平面形状は39×26cmの楕円形で、深さ30cmである。埋土は黒褐色シルト質の単層で直径10cm程度の白色礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK33

調査区南東部の標高35mの地点で検出した。平面形状は39×39cmの円形で、深さ17cmである。埋土は灰色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK34

調査区南東部の標高35.8mの地点で検出した。SR01を切る。平面形状は29×29cmの円形で、深さ17cmである。埋土は暗灰黄色シルト質の単層で直径5cm程度の白色礫を含む。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK35

調査区南東部の標高34.7mの地点で検出した。平面形状は46×36cmの楕円形で、深さ13cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK36

調査区南東部の標高33.7mの地点で検出した。SR02を切る。平面形状は32×31cmの円形で、深さ9cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK37

調査区南東部の標高34.7mの地点で検出した。SR02を切る。平面形状は32×19cmの楕円形で、深さ16cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK38

調査区南東部の標高34.7mの地点で検出した。平面形状は31×31cmの円形で、深さ20cmである。埋土は灰黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

SK39

調査区南東部の標高34.8mの地点で検出した。平面形状は42×38cmの楕円形で、深さ10cmである。埋土は黄褐色シルト質の単層である。遺物は出土していない。所属時期は不明である。

第IV章 まとめ

第1節 5次調査の調査成果

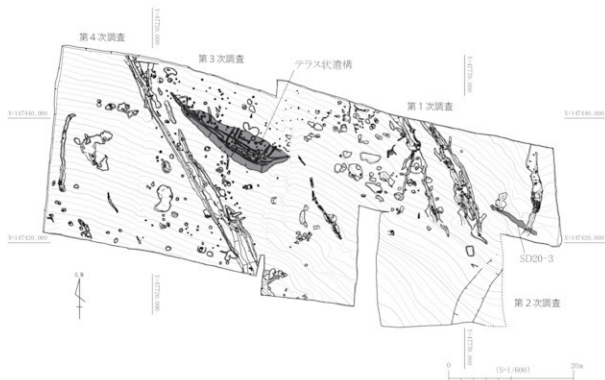
御殿貯水池南調査5次調査では、遺物の出土により確実に中世以前と判明する遺構は見当たらない。しかし、遺構の埋土や形状の特徴から中世に所属すると考えられる溝と土坑を検出した。ここでは、特徴的な遺構であるSD01～03について述べる。

SD01～03は調査区北東部に等高線と平行して東西に走る直線的な溝である。各溝の間隔は約5.2mとほぼ等間隔に並び平面・断面形状も類似することから、これらの遺構は相互に関連した遺構であると考えられる。遺物はSD02から土師器片が1点出土している。等間隔に配置され傾斜に直立すること、溝の周囲に同時期の遺構及び遺物が希薄であることから耕作に伴う鋤痕と想定される。

類似した遺構として、御殿貯水池南遺跡1次調査で等高線と平行して東西に走る直線的な溝であるSD20-3が挙げられる。断面形態等も類似しており同様な性格をもつと考えられる。遺物は弥生土器片及び土師器片が出土している。近くにはテラス状遺構及び建造物の想定がされるビット群が検出されており、この遺構の評価は次節で詳述するが、



第12図 御殿貯水池南遺跡5次調査区 (S=1/600)



第13図 御殿貯水池南遺跡1～4次調査区 (S=1/600)

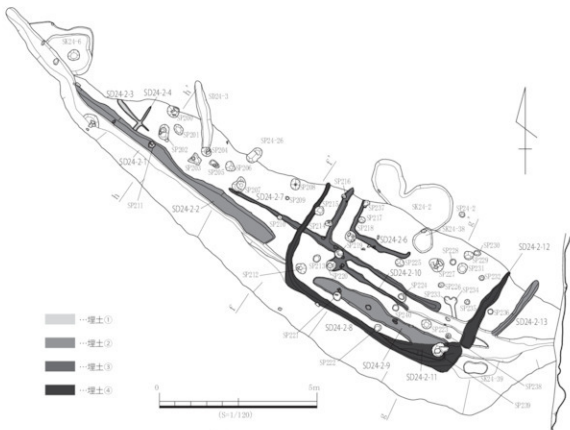
13世紀後半から14世紀前半の遺物が出土しており、継続した居住地と考えられる。これらの遺構を総合的に考えると、浄願寺山北麓の耕作に伴う開発が13世紀後半頃から行われ、5次調査で検出したSD01～03はそれらに伴うものである可能性が考えられる。

第2節 3次調査区テラス状遺構の再検討

第3次調査では調査区の中心でテラス状遺構（SD24-2）が検出された。長さ20m、奥行き4.4mを測る平面三角形の遺構である。傾斜面を削ることで平坦面を作り、平坦面上に複数の柱穴やコの字状の溝を検出したことから遺構内に建造物があったと考えられる。皿・杯・鍋・甕・鉢などの日常品が多く出土したことから、「近隣集落と関係する臨時的な生活空間」と評価している。

前報文『御殿貯水池南遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第161集）では埋土の色調について報告していなかったため報告する。溝及びピットの埋土の特徴は第3表に記載し、溝の切り合い関係は第14図及び第3表に示した。また、本報告書では前報文のSD24-2-11をSD24-2-9、11に区分した（SD24-2-9は前報文では欠番）。SD24-2-10の範囲も、東端がSD24-2-13まで続くとしたものから第14図のように確実に判明している箇所まで範囲を狭めた。

SD24-2で検出した溝及びピットは埋土の特徴から4種類に分類できる（埋土①～④）。埋土①はにぶい黄橙色シルト質極細砂で、対応する遺構はSD24-2-3、4にあたる。埋土②は灰黄褐色シルト質極細砂で花崗土を含み、対応する遺構はSD24-2-2、9、13である。埋土③は



第14図 御殿貯水池南遺跡3次調査 SD24-2平面図 (S=1/120)

灰黄色シルト質極細砂で、対応する遺構はSD24-2-6、7、10である。埋土④は灰黄褐色シルト質極細砂で花崗土を含み、対応する遺構はSD24-2-8、11、12である。

では、各埋土の遺構の特徴についてみる。埋土①の溝は西端に位置し、埋土②のSD24-2-2に切られる。埋土②の溝は埋土④の溝に切れ、途切れつつも大きくL字状に区画する。東西方向の長さは約14mで幅30～60cm程度である。埋土③の溝は埋土④の溝に切れ、T字及びL字状にめぐり、幅は安定して細く約20～30cmを測る。埋土④の溝はコの字状にめぐり、東西方向の長軸は約6m、幅25～35cm程度である。切り合い関係からみた構築順序は、埋土①→埋土②・③→埋土④である。これらの溝は、溝底面のレベルをみると南から北へと低くなるため排水の機能を持つ区画溝の可能性が高いだろう。

次にピットを埋土別に検討したが、柱穴が点在し建造物が復元できるほど柱筋が整うものは無かった。深度もややばつぎがあり、出土遺物の検討をしたが遺物が少量であったため埋土別の時期差や切り合い関係を見出せなかった。

以上より、テラス状遺構(SD24-2)には排水溝がめぐる小規模な建物跡が存在したと考えられ、数回の建替えもあったようである。出土遺物に鍋や釜、こね鉢が多く出土し、比定できる主な年代も13世紀後半から14世紀前半とやや幅があることから「臨時的な生活空間」とは評価しがたい。山地における長期的な居住地と考えられる。そして付近には耕作に伴う鋤痕が検出されており、居住地の側には耕作地が広がっていた可能性がある。

山裾における傾斜地の中世集落の発掘例は非常に少ないが、類似例として岡山県笠岡市に所在する園井土井遺跡があげられる(第15図)。園井土井遺跡は東西から山が迫る狭隘な平野部に位置し、底付き礎石建物を母屋とする中世居館である。青磁や備前焼が多く出土しており、15～16世紀に



第15図 園井土井遺跡 平面図(報告書の一部改変)

比定される。テラス状遺構は中心的建物から離れた斜面上で検出されており、本報告例と同様斜面側を削平することで平坦面を造成したと考えられる。テラス状遺構で検出された遺構は、4間×1間ないし3間×2間以上の建物にL字又はコ字状の溝が付随する。溝は全て単層で断面U字形であり、深度は10～20cmである。溝底部に高低差があることから排水溝と想定されている。

石清尾山山塊における中世の遺構の動向は不明な点が多いが、勝賀山東麓へ目を向けると発掘例が多く当地の土地開発を面的に迫ることが可能である。11世紀後半には地形が安定し、西打遺跡で条里坪界溝や屋敷地、鬼無藤井遺跡で掘立柱建物等が検出され、弥生時代以降途絶えていた「集落としての土地利用」がはじまる。そして13世紀末から14世紀初頭に西打遺跡、鬼無藤井遺跡、筑城城跡の調査区全域で条里地割が確認でき、区画溝や屋敷地が展開する。御殿貯水池南遺跡は山裾に立地し、13世紀以前まで遡る明確な遺構はないが、平野において開発が広範囲に広がると時期を同じくして山裾でも開発が進んでいた可能性がある。

このことから御殿貯水池南遺跡のテラス状遺構、耕作に伴う鋤痕の存在は、中世における土地利用の一端を示す重要な遺構であるといえる。

参考文献

- 香川県教育委員会編 2002『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
高松市教育委員会編 2015『御殿貯水池南遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第161集
岡山県教育委員会編 1988「関井土井遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 70

第1表 遺構観察表

遺構番号	検出高さ	長軸 (m)	短軸 (m)	深度	平面形状	重複関係	埋土の色調及び特徴	出土遺物
SD01	29.1～29.6	3.24	0.36	0.06	—	—	第10図参照	—
SD02	29.8～30.0	0.56	0.31～1.39	0.1	—	SK08, 10, 47に切られる	第10図参照	赤生土器片、土師質土器片
SD03	31.1～32.6	6.28	0.19～0.64	0.1	—	SK01を切る	第10図参照	—
SD04	33.1～33.7	2.76	0.46～1.09	0.13	—	—	2.5Y6/4にふい黄シルト 10cm程度の硬さ	—
SD05	30.7～34.4	2.76	1.02～1.52	0.06～0.17	—	—	—	ビニール袋
SD06	33.8～34.4	6.9	0.22～0.4	0.06	—	SK35を切る	—	埴土管
SD07	27.5～29.1	9.57	0.15～1.40	0.04～0.16	—	—	—	鉄製品
SR01	32.2～35.6	17.62	1.11～2.5	0.11～0.28	—	SK34, 40, 41に切られる	第11図参照	—
SR02	32.9～35.4	17.14	0.52～1.35	0.4	—	SK36, 37, 42, 54に切られる	第12図参照	—
SR03	31.9～33.1	4.82	0.64～1.34	0.18	—	—	—	—
SK01	31	0.59	0.46	0.1	方形	SD03に切られる	第10図参照	—
SK02	31.2	0.92	0.39	0.1	横円形	—	第13図参照	—
SK03	31.7	0.35	0.25	0.15	横円形	—	第13図参照	—
SK04	31.4	0.38	0.2	0.06	横円形	—	第12図参照	—
SK05	31.5	0.46	0.26	0.13	三角形	—	第13図参照	土師質土器片
SK06	31	0.43	0.21	0.17	三角形	—	第13図参照	—
SK07	30.3	0.76	0.7	0.27	横円形	SK08に切られる	2.5Y7/4黄シルト	—
SK08	30.1	0.92	0.44	0.1	横円形	SD02, SK07を切る SK47に切られる	2.5Y6/2灰黄シルト	—
SK09	30.1	0.41	0.35	0.21	円形	—	2.5Y7/8黄褐色シルト	—
SK10	30	0.67	0.33	0.11	不整形横円形	SD02を切る	10YR6/4にふい黄褐色シルト	—
SK11	30	0.55	0.46	0.17	円形	—	2.5Y5/2暗灰黄シルト 黄ブロック含む	—
SK12	29.9	0.21	0.13	0.08	円形	—	2.5Y5/3黄褐色シルト	—
SK13	29.9	0.29	0.18	0.09	横円形	—	2.5Y5/3黄褐色シルト	—
SK14	30.1	0.21	0.2	0.05	円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト	—
SK15	30.3～30.4	0.93	0.3	0.19	円形か	—	10YR5/8黄褐色シルト 白色砂粒含む	—
SK16	30.5	0.21	0.17	0.02	円形	—	10YR5/8黄褐色シルト	—
SK17	30.5	0.26	0.24	0.06	円形	—	7.5YR4/2灰褐色 細粒砂	—
SK18	30.9	0.31	0.23	0.09	横円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト	—
SK19	30.9	0.37	0.06	0.09	横円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト 黄色ブロック含む	—
SK20	31	0.19	0.16	0.07	円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト 黄色ブロック含む	—
SK21	31.4	0.21	0.1	0.04	横円形	—	10YR4/2灰黄褐色 細粒砂	—
SK22	31.6	0.1	0.1	0.05	円形	—	2.5Y5/1黄褐色シルト	—
SK23	31.6	0.27	0.11	0.05	横円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト 黒ブロック含む	—
SK24E	32.3～32.5	0.76	0.7	0.54	横円形	—	10YR5/3にふい黄褐色シルト	—
SK24W	32.2～32.4	2.95	0.88	0.44	横円形	—	10YR5/3にふい黄褐色シルト 3～5cm程度の砂粒	—
SK25	32.2	0.27	0.17	0.05	円形	—	10YR4/2灰黄褐色シルト	—
SK26	32.2	0.31	0.16	0.07	円形	—	10YR4/3にふい黄褐色シルト	—
SK27	32	0.34	0.28	0.11	円形	—	10YR7/3にふい黄褐色 中粒砂 5cm程度の硬さ	—
SK28	32.2	0.58	0.4	0.12	横円形	—	10YR7/3にふい黄褐色 中粒砂 10cm程度の硬さ	—
SK29	32.2	0.63	0.44	0.18	横円形	SK30に切られる	10YR7/3にふい黄褐色 中粒砂 5～10cm程度の硬さ	—
SK30	33	1.16	0.76	0.19	横円形	SK29を切る	10YR7/3にふい黄褐色 中粒砂 5～20cm程度の硬さ	—
SK31	33.3	0.54	0.36	0.16	横円形	—	2.5Y4/2暗灰黄シルト	土師質土器片
SK32	34.6	0.39	0.26	0.3	横円形	—	2.5Y3/1黄褐色シルト 10cm程度の白色硬さ	—
SK33	35	0.39	0.39	0.17	円形か	—	5Y5/1灰シルト	—
SK34	35.8	0.29	0.29	0.17	円形	SR01を切る	2.5Y4/2暗灰黄シルト 5cm程度の白色硬さ	—
SK35	34.7	0.46	0.36	0.13	横円形	—	10YR7/3にふい黄褐色シルト	—
SK36	33.7	0.32	0.31	0.09	円形	SR02を切る	10YR6/4にふい黄褐色シルト	—
SK37	34.7	0.32	0.19	0.16	横円形	SR02を切る	2.5Y5/3黄褐色シルト	—
SK38	34.7	0.31	0.31	0.2	円形	—	10YR4/2灰黄褐色シルト	—

SK39	34.8	0.42	0.38	0.1	楕円形	—	10YR5/6黄褐シルト	—
SK40	34.4	1.24	0.52	0.4	楕円形	SR01を切る	2.5QY7/1弱オリーブ灰シルト	—
SK41	34.9	0.29	0.28	0.13	円形	SR01を切る	5Y6/2灰オリーブシルト	—
SK42	33.1	1.07	0.41	0.08	不整形円形	SR02を切る	オリーブ灰シルト	—
SK43	32.1~31.9	1.1	0.8	31.8	円形	—	2.5QY7/1弱オリーブ灰シルト	—
SK44	33	0.56	—	0.08	円形	SK57に切られる	2.5QY6/1オリーブ灰シルト	—
SK45	33.4	1.54	0.78	0.17	楕円形	—	オリーブ灰シルト	—
SK46	28.9	1.03	0.5	0.49	楕円形	—	2.5QY6/1オリーブ灰シルト	—
SK47	30.3	1.38	0.54	0.29	楕円形	SDQ2, SK08を切る	—	獣骨
SK48	30.5	0.94	0.62	0.24	楕円形	—	—	ビニール、獣骨
SK49	30.9	1.07	0.99	0.32	楕円形	—	—	ビニール、獣骨
SK50	31.6	0.36	0.26	0.12	楕円形	—	10YR4/2灰黄褐シルト	獣骨
SK51	31.7	0.48	0.21	0.11	楕円形	—	10YR4/2灰黄褐シルト	獣骨
SK52	35.4	1.36	0.84	—	楕円形	—	—	硬多量に埋没土を含む
SK53	35.6	0.62	0.48	0.3	楕円形	—	—	ガラス、鉄製品、獣骨
SK54	35.2	1.62	1.11	0.22	楕円形	SR02を切る	—	ビニール、獣骨
SK55	34.7~35	1.98	1.16	0.31~0.69	方形	SD06に切られる	—	ビニール、獣骨
SK56	33.6	0.48	0.4	0.15	円形	—	—	獣骨
SK57	33	0.71	0.3	0.2	円形	SK44を切る	—	獣骨
SK58	34.5	1.43	1.26	0.34~0.57	楕円形	—	—	ビニール、獣骨

第2表 遺物観察表

実測 No.	緯度 No.	調査 年度	遺構名	種類	器種	法量			調整		色調		胎土	構成	備考
						口徑	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	7	5次	遺構跡中	土師質 土器	皿(口縁部)	(8.5)	—	(0.3)	++	++	7.5YR6/4 にふくむ	7.5YR6/6 にふくむ	精良 0.5mm以下の チャート・赤褐色粒種が に含む	良	—
2	7	5次	遺構跡中	土師質 土器	皿(底部)	—	—	—	断面につき調整 不明瞭	断面につき調整 不明瞭 ナデカ	7.5YR7/6 にふくむ	7.5YR7/7 にふくむ	精良 0.5mm以下の チャート・赤褐色粒種が に含む	良	—

第3表 御殿貯水池南遺跡3次調査テラス状遺構 遺構観察表

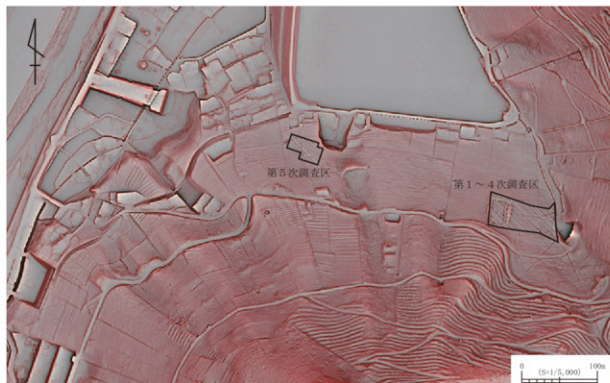
遺構 番号	埋土の色調及び特徴	重複関係	傾土の有無	出土遺物
SD24-2-1	にふくむ黄褐色+にふくむ黄褐色+にふくむ黄褐シルト質極細砂+明黄褐 シルト質極細砂(10YR6/4+3/4+5/4+7/6地山のくずれ)	SD24-2-2, SK24-6を切る SD24-2-8に切られる	—	土師器皿・杯、足、須恵器杯
SD24-2-2	①灰黄褐シルト質極細砂(10YR5/2)花崗土を含む	SD24-2-4を切る SD24-2-1, SP211に切られる	—	—
SD24-2-3	④にふくむ黄褐色シルト質極細砂(10YR6/3)	SD24-2-2に切られる	—	—
SD24-2-4	④	SD24-2-2に切られる	—	—
SD24-2-5	欠番	—	—	—
SD24-2-6	②灰黄シルト質極細砂(2.5Y6/2)	SD217, 218, 237に切られる	—	—
SD24-2-7	②	SD24-2-8, SP207, 218, 214, 216, 219Cに切られる	—	土師器皿、足、須恵器鉢(東横 系?)
SD24-2-8	③灰黄褐シルト質極細砂(10YR4/2)花崗土の地山を含む	SD24-2-1, 2-7, 2-11, SP222を切る SP219に切られる	—	須恵器杯・片口鉢
SD24-2-9	①	SD24-2-11, SP239, 221に切られる	—	土師器杯(底部)
SD24-2-10	②	SP220に切られる	—	土師器鉢
SD24-2-11	③	SD24-2-9を切る SD24-2-8, SP239に切られる	—	—
SD24-2-12	③	—	—	土師器杯
SD24-2-13	①	—	—	—
SP24-200	A にふくむ黄褐色+にふくむ黄褐シルト質極細砂 (10YR6/3+10YR5/3)	—	有	—
SP24-201	B にふくむ黄褐色+淡黄シルト質極細砂(10YR6/3+2.5Y7/4)	—	有	—
SP24-202	B	—	有	—
SP24-203	B	—	—	—

SP24-204	D 浅黄シルト質極細砂(2.5Y7/5)	SD24-3を切る	—	—
SP24-205	A	—	—	—
SP24-206	A	—	—	—
SP24-207	A	SD24-2-7を切る	—	—
SP24-208	A	—	有	土師器片
SP24-209	A	—	—	—
SP24-210	A	SD24-2-7を切る	—	土師器片
SP24-211	B	SD24-2-2を切る	—	—
SP24-212	A	—	有	土師器片
SP24-213	C にごい黄緑シルト質極細砂+灰白色シルト(地山) (10YR6/3+2.5Y8/2)	—	—	—
SP24-214	B	SD24-2-7を切る	—	—
SP24-215	B	SD24-2-8を切る	—	土師器片
SP24-216	B	SD24-2-7を切る	—	—
SP24-217	C	SD24-2-6を切る	—	—
SP24-218	C	SD24-2-6を切る	—	土師器片
SP24-219	C	SD24-2-7を切る	—	—
SP24-220	A	SD24-2-10を切る	有	—
SP24-221	C	SD24-2-9を切る	—	—
SP24-222	B	SD24-2-6を切る	—	—
SP24-223	B	—	—	—
SP24-224	B	—	—	—
SP24-225	A	—	—	—
SP24-226	A	—	有	土師器片
SP24-227	C	—	—	—
SP24-228	A	—	—	土師器片
SP24-229	A	—	—	須恵器片口鉢(東横系?)
SP24-230	B	—	有	土師器片
SP24-231	A	—	—	土師器杯
SP24-232	A	—	—	土師器片
SP24-233	A	—	—	—
SP24-234	A	—	—	—
SP24-235	A	—	—	土師器片
SP24-236	B	—	—	—
SP24-237	B	SD24-2-6を切る	—	灰緑石、土師器片
SP24-238	B	—	—	土師器皿
SP24-239	A	SD24-2-11, 2-9を切る	—	—
SP24-240	A	—	—	—

写真図版



調査区全景と周辺風景（南から）



赤色立体地図からみた遺跡周辺地形（1/5,000）



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



調査区全景（北から）



調査区西側 谷部（南から）



SR01、02完掘状況（南から）



SR01、02完掘状況（南西から）



SR01南側断面（北から）



SR01北側断面（北から）



SR02断面（北から）



SD01断面（西から）



SD01、02、03完掘状況（南から）



SD01完掘状況（南東から）



SD02完掘状況（南東から）



SD03完掘状況（南東から）



SD02断面（西から）



SD03・SK01断面（西から）



SK01完掘状況（西から）



SK02断面（東から）



SK03断面（東から）



SK04断面（北から）



SK05断面（北から）



SK06断面（北から）

報告書抄録

[illegible]

高松市埋蔵文化財調査報告第188集
都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
第4冊

御殿貯水池南遺跡Ⅱ (第5次調査)

平成30年3月31日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 高松市教育委員会
印刷 藤田印刷株式会社